

VII. 混乗船における東南アジア船員の生活行動と労働に関する調査研究

—フィリピン船員との混乗について— 第三部 あるフィリピン船員集団について

目 次

A. はじめに	70
B. 分析結果	71
C. あとがき	94

A. はじめに

大手船社のみならず、最近、中小・近海船社を主とする関係者から、混乗問題に関連して、東南アジア船員の教育その他の状況に関する資料を求める声が高まっている。特に、1980年、フィリピン船員との混乗に関する報告書を出している、直接我々のところへの問い合わせも増加している。

確かに、フィリピンのみならず、発展途上国の船員事情については不明な部品が極めて多い。途上国故に、諸統計も未整備であるし、また不完全であり、さらに、変化が激しく、船員数すらわからないとさえいえる状況である。(因みに、フィリピンの場合でも、1979年には、登録船員数は115,326人であったが、最近入手した資料によれば、1982年には、166,220人となっている。)

混乗の是非はともかくとして、現実の混乗にかかわる諸問題を検討するためには、そうした基本的データを整理し、これを関係者間で共有することが肝要であるにもかかわらず、現実には、共有できるようなデータは今のところない。

我々は、こういうデータを提供するために、

なんとか現地調査を実施すべく計画中であるが、未だ若干、時間を要するようである(1982年に実施)。

フィリピン船員の教育や言語能力その他の個別的状況については、我々が実施した混乗船A号の調査で出会った船員に関して、及び僅かな時間、マニラに滞在して入手した資料にもとづいて、若干の報告をしてあるが、決して充分なものではない。これ以上は、前述したとおり、じっくりと時間をかけた現地調査が必要であるが、今回、大変有難いことに、いくつかの船会社の御好意によって、それらの会社が、ここ数年間に使用したフィリピン船員に関する個人資料を分析する機会を与えられた。

提供を受けた資料のうち今回分析に使用したものは、それらの会社が使用したことのある船員464名(同一人が何回も使用されている例は多い)分である。

ただし、個人資料の全ての欄が必ずしも記入されているわけではないので、分析した項目によっては不明欄が多くなる、という残念な一面もある。

しかし、それでもこうした分析資料で公表されているものは皆無とも言える現状からすれば、かなり参考になるものと思われる。

脚注

*混乗船における東南アジア船員の生活行動と労働に関する調査研究、第一部・第二部・大橋・服部、1980。

今後とも、できるだけこうした資料を入手すると共に、機会を得て現地調査を実施して、より詳細に報告してゆきたいと考えている。

なお、今回分析に使用した資料のなかには、船長、機関長、通信士も含まれている。これらの人々は、現在混乗船に乗っているわけではないが、過去に航海士や機関士として乗ったこともあり、昇進後も日本の海運産業と深いかわりをもって海上生活を送っている人々であることを断っておきたい。

また、本文中に、報告書第一部、とあるのは、我々が既に発表している報告書「混乗船における東南アジア船員の生活行動と労働に関する調査研究、— フィリピン船員との混乗について—」の第一部、フィリピンとフィビン船員について」を意味し、報告書第二部とあるのは、同上報告書「混乗船における東南アジア船員の生活行動と労働に関する調査研究、— フィリピン船員との混乗について—」の第二部、混乗船 A号について」を意味するものとする。

なお、これらの報告書の一部は、本研究会資料第27号(1984)に転載されている。

B. 分析結果

1. 年令構成

464名について、5才区切りで年令構成をみると、表1のとおりである。目安として一応求めてみた平均年令は33.7才であるが、主力は、20才～34才の年令層で、全体の62.9%を越している。したがって、かなり若い年令の者が多く、最近、船で働く若者が増加していることを反映しているといえよう。なお、この年令層の者は、第二次大戦後に生まれた

人々であるという意味を持っている。そういう意味では、逆に今次の戦争を自ら体験した人々も25%は居るわけで、これらの人々は日本の占領時代の所業の直接・間接の証人である。それを思えば、この4人に1人という数字は大変意味の大きい数字であって、我々日本人がフィリピンの人々と接するとき、自らの言動に深い注意を払うべきことを教えてくれているといえよう。日本語が判る人も結構いるのである。

なお、この年令構成と、A号乗組員のそれとくらべると、A号の場合は、若い人が多い。フィリピン船員のなかでも、とりわけ若い人、特に20～24才の人が多かったといえよう。(報告書第2部9頁、表7・乗組員の年令構成、参照)。

因みに、表1の右端欄は、日本の外航二団体所属船員の年令構成(1980)をもとに計算して求めた比率で示したものであるが、これと比較すると、フィリピン人の場合は、若い船員の占める割合が高いといえよう。

表1 年令構成

年令	フィリピン船員		日本船員
	人	%	%
～ 19			0.2
20～24	81	17.5	4.6
25～29	106	22.8	13.8
30～34	105	22.6	16.4
35～39	49	10.6	14.0
40～44	40	8.6	14.8
45～49	31	6.7	14.7
50～54	36	7.8	17.0
55～	13	2.8	4.5
	3	0.6	
Total	464	100.0	100.0

2. 身長及び体重

これらをまとめたものが表2である。これで見るとおり、身長は若い人も含めて、そう大きくはなく、むしろ最近の日本人からみれば、やや小さめと言えようか。

体重は、身長よりも個人差が大きくなって、やや太り気味の人もかなり居るといった結果になっている。

表2 身長及び体重

年令	身長			体重		
	N人	\bar{x} cm	S.D.	N人	\bar{x} kg	S.D.
～19	—	—	—	—	—	—
20～24	79	166.5	6.54	81	55.9	6.10
25～29	101	166.2	5.15	101	57.4	6.27
30～34	101	167.0	5.02	102	61.5	8.79
35～39	48	165.7	5.58	47	63.9	8.56
40～44	38	165.8	4.64	37	62.3	9.34
45～49	29	164.0	4.73	28	61.8	9.63
50～54	35	164.4	4.01	35	61.7	7.72
55～59	13	166.9	5.92	13	68.7	9.97
	20			20		
Total	464			464		

N 人数, \bar{x} 平均値, S.D. 標準偏差

これは比較的若い人が多いフィリピン船員の年令構成の影響と考えられる。ただし、前述の日本データは、職員についての調査であるので、その影響も多少はあるかもしれない。

次に子供の数をみると、これは資料の不備のため不明が多いのが残念であるが、それを除いて、まとめたものが表4である。

子供が居ない人も9.6%は居るが、これは比較的若い人で、あとは、3人の25.6%が最も多くなっている。報告書の第一部でも記したように、家族集団を極めて重要視し、多産をよしとした彼等の伝統的価値観からすれば、この資料の示す子供の数は、むしろ少いとみても良いのかもしれない。

表3 妻帯者

	人	%
独身者	206	44.4
妻帯者	253	54.5
不明	5	1.1
Total	464	100.0

3. 家族構成

家族構成についてまとめると、表3のとおりとなる。独身は44.4%、妻帯者は54.5%となっている。

日本船員の場合は、1976年に我々が協力して実施した調査結果^{*}によれば、独身者は25.4%、妻帯者は74.5%となっていたので、フィリピン船員の方が妻帯率は低いともいえよう。

脚注

* 船員の生活態様と意識調査。

日本海技協会 1976.

表4 子供の数

子供の数	人	%
0	16	9.6
1	29	17.4
2	38	22.8
3	43	25.6
4	33	19.8
5	5	3.0
6	3	1.8
Total	167	100.0
不明	86	
Grand Total	253	

A号の乗組員の場合は、24名のうち10人が結婚していて、そのうち、6人が3人の子供を、3人が4人の子供を、1人が1人の子供を持っていた。したがって、A号の場合には、やや、子供の数が多かったといえるかもしれない。

4. 出身地及び現住所

a. 出身地

資料の出生地(Birth Place)欄に記入されているものを、州(Province)毎にまとめて図にしたものが図1である。

大マニラ市あるいはマニラ首都圏ともよばれる Metro Manila 及び隣州の Cavite 州が最も多く、夫々64人で、全体の13.9%であり、Panay島の Iloilo 州の48人、10.4%が次いでおり、この3州で38.2%を占めている。この図で見る限り、出身地は、全体に広がっているような印象もうけるが、多くはいくつかの州に集中している。この点は、島別にみるとより一層はっきりとする。すなわち表5にあるように、Luzon島が67.0%で圧倒的に多く、第二位の Panay 島の15.3%をはるかにひきはなしている。この二つの島で80%を越しているわけで、人口の集中度を反映していると共に、海事教育機関の充実程度の影響も推察される結果となっている。したがって、巷間にあるフィリピンのあらゆる島から、船員は集ってきている、という説は、この資料でみるかぎり必ずし

も正確ではない。

表5 出身地及び現住所の島別比率

島 別	出身地		現住所	
	人	%	人	%
Luzon	311	67.0	419	90.3
Panay	71	15.3	16	3.4
Negros	19	4.1	7	1.5
Cebu	15	3.2	7	1.5
Leyte	10	2.2	1	0.2
Mindanao	9	2.0	4	1.0
その他	16	3.4	1	0.2
不明	13	2.8	9	1.9
Total	464	100.0	464	100.0

b. 現住所

現住所について、出身地と同様に州別にまとめてみた結果が図2である。出身地よりも

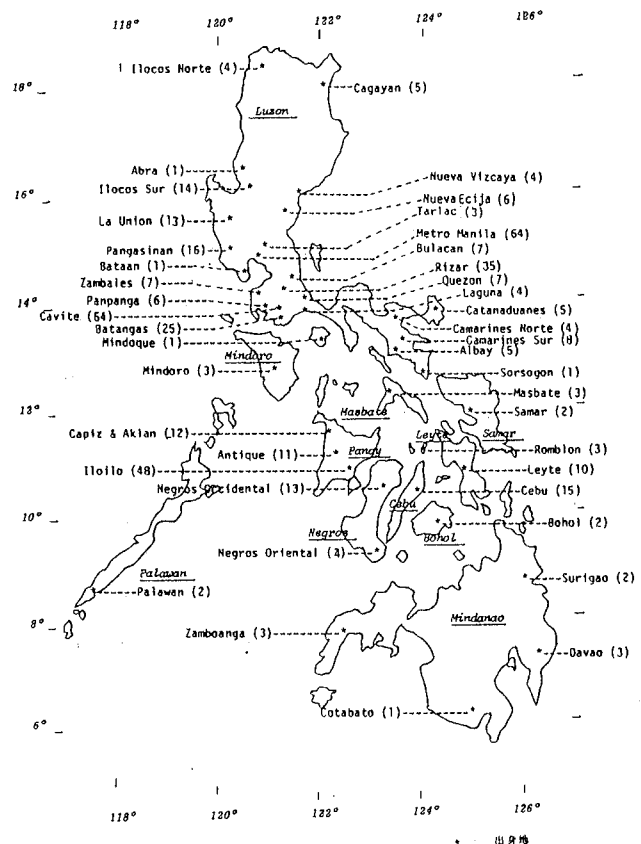


図1 出身地の分布

一層特定地域に対する集中傾向が強く、Metro Manila には、全体の35.7%にあたる147人が住んでいる。次は隣州の Rizal で22.9%の106人、三番目は同じく隣接する Cavite 州で22.7%の105人、マニラを中心とするこの三州には、実に81.3%の人が住んでいるわけである。

島別にみれば、前掲の表5のとおりで、Luzon 島に90.3%が住んでおり、あとは極く僅かである。後述するように、Panay 島には Iloilo Maritime Academy のような有力な海事教育機関があり、その出身者もかなり多いが、住居は大都市、もしくはその近郊に構えるという、いわゆる都市集中傾向がみられるようである。

以上、出身地、現住所をまとめて島別、州別に示したのが表6である。

c. A号との比較

A号のフィリピン人乗組員24名については、既に報告書第二部で述べたとおりであるが、その結果とくらべてみると、A号の場合の方が、その出身地において、若干、広がりが大きい点、及び現住所は1名を除き、全員マニラ及びその周辺である点を除けば、全体的傾向は、ほとんど同様である。したがって、出身地及び現住所に関しては、A号の乗組員は普通の集団であったといえよう。

5. 言語能力

フィリピンは、その言語が

非常に多く、そこで、タガログ語を母体とするピリピノ語と英語とを公用としていることは、報告書の第一部で述べたとおりである。今、入手した464名について、その言語能力をまとめてみた結果が表7である。但し、464人全部についてではなく、記入してあった306人についての分析結果である。

ピリピノ語については、ほとんどの者が、話す、読む、書く、ともにかなりできると考えていることが判る。国全体のピリピノ語の普及率は55.2%と発表されているが、これに比べれば、この船員集団は、ピリピノ語の能力が非常に秀れていると言える。それは、出身地の項で述べたとおり、ルソン島出身の者が多く、ピリピノ語がルソン島中央部の種族が使ってきたタガログ語を母体としている

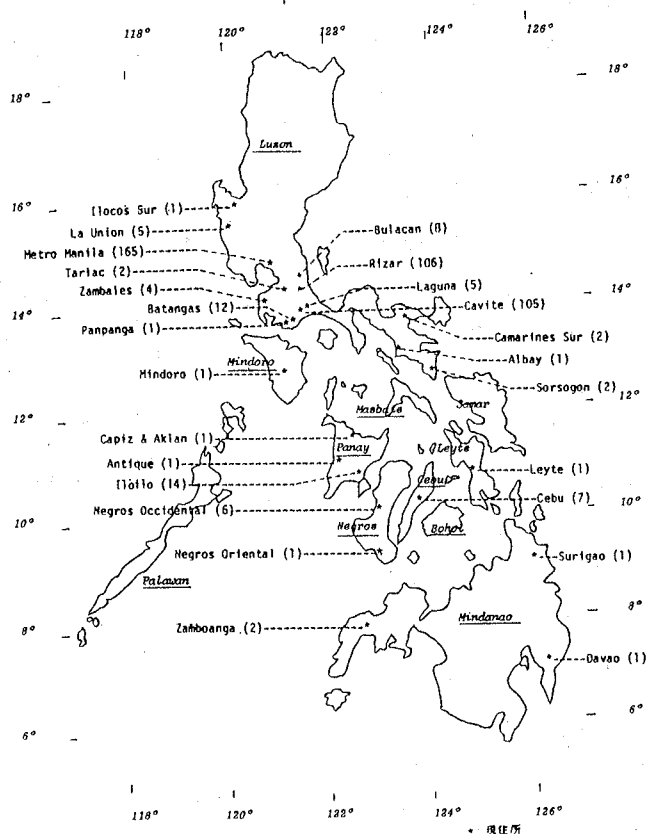


図2 現住所の分布

表6 出身地・現住所の州別島別分布

島	州	出身地		現住所	
		人	%	人	%
LUZON	Metro Manila	64	13.9	165	35.7
	Cavite	64	13.9	105	22.7
	Batangus	25	5.4	12	2.6
	Rizar	35	7.6	106	22.9
	Panagasian	16	3.4	—	—
	La Union	13	2.8	5	1.1
	Ilocos Sur	14	3.0	1	0.2
	Quezon	9	1.9	—	—
	Zambales	7	1.5	4	0.9
	Pampamqa	6	1.3	1	0.2
	Nueva Ecija	6	1.3	—	—
	Camarines Sur	8	1.7	2	0.4
	Bulacan	7	1.5	8	1.7
	Albay	5	1.1	1	0.2
	Cagayan	5	1.2	—	—
	Catanaduanes	5	1.1	—	—
	Laguna	4	0.9	5	1.1
	Nueva Vizcaya	4	0.9	—	—
	Tarlac	3	0.6	2	0.4
	Camarines Norte	4	0.9	—	—
Ilocos Norte	4	0.9	—	—	
Abra	1	0.2	—	—	
Bataan	1	0.2	—	—	
Sersogon	1	0.2	2	0.4	
PANAY	Iloilo	48	10.4	14	3.0
	Capiz & Aklan	12	2.6	1	0.2
	Antique	11	2.4	1	0.2
NEGROS	Negros Occidental	15	3.2	6	1.3
	Negros Oriental	4	0.9	1	0.2
CEBU	Cebu	15	3.2	7	1.5
LEYTE	Leyte	10	2.2	1	0.2
MIN-DANA O	Davao	3	0.6	1	0.2
	Sirigao	2	0.4	1	0.2
	Zamboanga	3	0.6	2	0.4
	Cotabato	1	0.2	—	—
そ の 他	Mindoro	3	0.6	1	0.2
	Masbate	3	0.6	—	—
	Romblon	3	0.6	—	—
	Palawan	2	0.4	—	—
	Samar	2	0.4	—	—
	Bohol	2	0.4	—	—
Marinduque	1	0.3	—	—	
不 明		13	2.8	9	1.9
Total		464	100.0	464	100.0

ことを考え合せれば、当然の結果とも言える。しかし、それにしても、流暢にできるとする人が多いことは、彼等がフィリピン人のなかでも、かなり高い教育を受けてきた人達であることが推察される。それは、次の英語に関する能力をみても言えることである。

英語に関しては、話す、読む、書く、で若干の相違はあるが、“流暢にできる”と“かなりできる”を合計すると、夫々90%を越している。フィリピン全体では、英語が話せる人は、44.7%と公表されているから^{*}、この船員集団の英語に関する能力は相当なものと考えられる。

フィリピンには、The higher education, the better English. という言葉があるが、その意味あいの具体的表現と考えられ、この船員集団は、フィリピンでもかなり高い教育を受けてきた人達であることが推察される。

その他の様々な言語は、彼等の出身地と対応している点を除けば、きわだった特徴は見られない。

なお、僅かではあるが、日本語が少しできる人がでてきている。この人達は、経歴をみても、日本人との混乗を何回か体験してきている若い人達で、今後、こういう人達が増加してゆくことが予想される。但し、年配の人のなかにも、本当は日本語ができる、あるいは、わかる人達が居るが、彼等はどのようなわけか、それを表には出したがらない。したがって、日本語ができる、あるいは、

わかる人達の実数はもう少し多いとも考えられる。

なお、インドネシア語、マライ語ができる人が夫々1人いる。数は少ないが、フィリピン

脚注

* 報告書第一部5頁参照

人の言語状態の一断面を象徴しているともい
えよう。

以上の結果を、A号と比較してみると、ピ
リピノ語については、特に差はないが、英語
に関しては、話す、書く、読む、のいずれも
“流暢にできる”とする人の割合がA号の場
合の方が少ないことに気付く。すなわち、今
回の船員集団では、“流暢にできる”と“か
なりできる”がほとんど同数であるが、A号
では、その比はほぼ1：3で“流暢にできる”
が少なくなっている。しかし、実際上は、A
号で、なんらかの障害がなかったことは、前
述したとおりである。

その他の在来言語でも、全体で非常に少い
Pampanga, Bicalno, Waray, などを使う
人がA号にいたことは、特徴の一つとして数

えることができる。

6. 職種別構成

464名について、職種別にまとめると、表
8のとおりである。司厨長がいないこと、エ
レクトリシアンがいること、この2点を除け
ば、日本船に通常乗組んでいる全職種を一応
カバーしていることがわかる。そうして、船
長・機関長も、混乗船ではないが、日本の海
運産業の関連分野に既に登場していることは
注目に値することである。

人数としては船内での必要人数を反映して
か、甲板部員の117名が最も多く、次いで機
関部員が99名、司厨部員が77名、航海士が60
名、機関士が51名となっている。なお、この
職種とは、乗船中のものについては現職、
下船者については最終下船時の職種のことで

表7 言語能力 (306人)

Fluently Fairly Poorly Tot.					Fluently Fairly Poorly Tot.					
Filipino	S	255	45	6	306	Waray	S		1	1
	R	258	42	6	306		R		1	1
	W	251	47	7	305		W		1	1
English	S	113	164	26	303	Kinaraya	S	2		2
	R	155	128	20	303		R	2		2
	W	139	142	22	303		W		2	2
Spanish	S	2	19	14	35	Ibanag	S	1		1
	R	5	30	6	41		R	1		1
	W	4	22	11	37		W	1		1
Nippongo	S		6	6	12	Palawan	S	1		1
	R		3	8	11		R	1		1
	W		3	8	11		W	1		1
Mandarin	S			5	5	Zambal	S	2		2
	R			5	5		R	2		2
	W	1		5	6		W	2		2
Ilengo	S	49	4		53	Pampanga	S	1	1	2
	R	49	4		53		R	1	1	2
	W	26	24	3	53		W	1		1
Cebuano	S	16	5		21	Surigeo	S	1		1
	R	16	5		21		R	1		1
	W	15	5	1	21		W	1		1
Ilocano	S	22			22	Panga- sinan	S	2	1	3
	R	22			22		R	1		1
	W	9	13		22		W	1	1	1
Hiliga- Yanon	S	3	1		4	Karaya	S	1		1
	R	3	1		4		R	1		1
	W	2	2		4		W	1		1
Bicol	S	10	3		13	Bohol	S	1		1
	R	10	2		12		R	1		1
	W	2	9	1	12		W		1	1
Indonesian	S	1			1	Bicolano	S	1		1
	R	1			1		R	1		1
	W	1			1		W	1		1
Malay	S	1			1					
	R	1			1					
	W	1			1					

脚注 * 報告書第二部11頁参照

表 8 職 種 別 構 成

Master	16	Chief Engineer	15	Master	16
Chief Mate	19	First Engineer	17	Mate	60
Second Mate	21	Second Engineer	12	Chief Engineer	15
Third Mate	20	Third Engineer	22*	Engineer	51
Total	60	Total	51	Radio Operator	15
Boatswain	17	Machinist	13	Deck Rating	117
Able Bodied Seaman	56	Oiler	52	Engine Rating	99
Ordinary Seaman	44	Wiper	34	Electrician	14
Total	117	Total	99	Catering Rating	77
Chief Cook	15	Radio Operator	15	Grand Total	464
Second Cook	17	Electrician	14		
Messman	45				
Total	77				

* 3名のFourth Engineerを含む

ある。これらのうちの多くの人々は、これらの会社の系列船に何回も乗船してきているので、過去には、下位の職種や、異なるパートで働いてきた人達がかなり居る。この点については、職歴の項で後述する。

表9は、上記の職種別構成と、フィリピン船員全体のなかで対応する職種群の登録船員数との関係を見たものである。すなわち、フィリピン船員全体といっても、その総数は、1979年で115,326人であることは既に報告してあるが、最近入手したN.S.B.の資料によれば、1980年には、130,772人となっている。そのうち、Cadet, Deck Boy, Engine Boy, など雇用の対象とはならない人を除くと、78,336人となる。そこで、この78,336人を100としたときの、各職種群の構成率と、今回の分析の対象とした464名を100としたときの各職種群の構成率をまとめたものが右欄の表9である。これをみる限り、今回の分析の対象とした集団の職種別構成は、フィリピン船員全体の職種別構成と、大きな差はないとみることができる結果となっている。但し、航海士については、今回の資料において、その占める割合が若干高いようであ

表 9 母集団職種群別の構成率と今回の資料の構成率

職 種 群	フィリピン国登録船員数		今回の資料	
	人	%	人	%
Master	1,462	1.9	16	3.4
Mate	5,861	7.5	60	12.9
Chief Engineer	1,378	1.8	15	3.3
Engineer	8,733	11.1	51	11.0
Radio Operator	2,590	3.3	15	3.3
Deck Rating	24,142	30.8	117	25.2
Engine Rating	17,877	22.8	99	21.3
Electrician	3,939	5.0	14	3.0
Catering Rating	12,354	15.8	77	16.6
Total	78,336	100.0	464	100.0

る。

7. 職 歴

a 各職種の経験日数

まず、各職種の経験日数^{*1}をみてみよう。次頁の図3は、現在、過去を問わず、各職種に就いたことがある人の経験日数を、各職種

脚注

*1 本報告書中でいう経験日数とは、実乗船日数であって、昇進後の経過日数ではないことに注意。また、記録により確認できる日数を用いているが、記録もれなどもあり、したがって、ここに示した日数より短いことはない、と理解すべきである。

ごとに示したもので、かなり個人差があることがはっきりとわかる。なお職種の右肩に●が附してある職種は、その後、航海士もしくは機関士になった人達だけについて、別に示したものである。

b. 普通型の職歴

次に現職に就く前の職歴をみてみよう。

フィリピン船員が、現在の職種に就くまでのような職歴を経てきているかという問題は大変興味のあるところである。既に報告したように、*1 持っている海技資格とは必ずしも一致していないし、労働市場との関係もあって職員になる前に部員として働く人も沢山いる。したがって、彼等の経験の度合いや技術

の程度を考察する上でも、この職歴に関する分析は極めて重要であり、またそれ故に船社をはじめ多くの関係者から分析を要請されている点でもある。

しかし、こういう内容は、詳細な面接聞き取りを含む現地調査を実施しないことには、その実態を把むことは大変困難である。我々はいずれ近い将来に現地調査を実施して報告したいと考えているが、さしあたり手もとの資料を使って若干考察してみる。

手もとにある464名

脚注

*1 報告書第一部17頁及第二部14頁。

分の資料も、必ずしも正確ではなく、また未記入のものもあつたりする。現職以前が全くわからない人もいる。したがって、ある程度の目安でしかないことを前提とした上で、以下結果を記すことにする。

彼等の職歴をみてまず気付くことは、下位の職から順次上位の職に昇進してきたタイプと、下位になったり上位になったり、あるいは、他のパートの職をとったりして昇進してきたタイプと、大きく2つに分れることである。そこで、前者は日本で普通にみられるタイプに近いので、普通型、後者を変則型とよぶことにする。

すなわち、下記のコースをたどった者、も

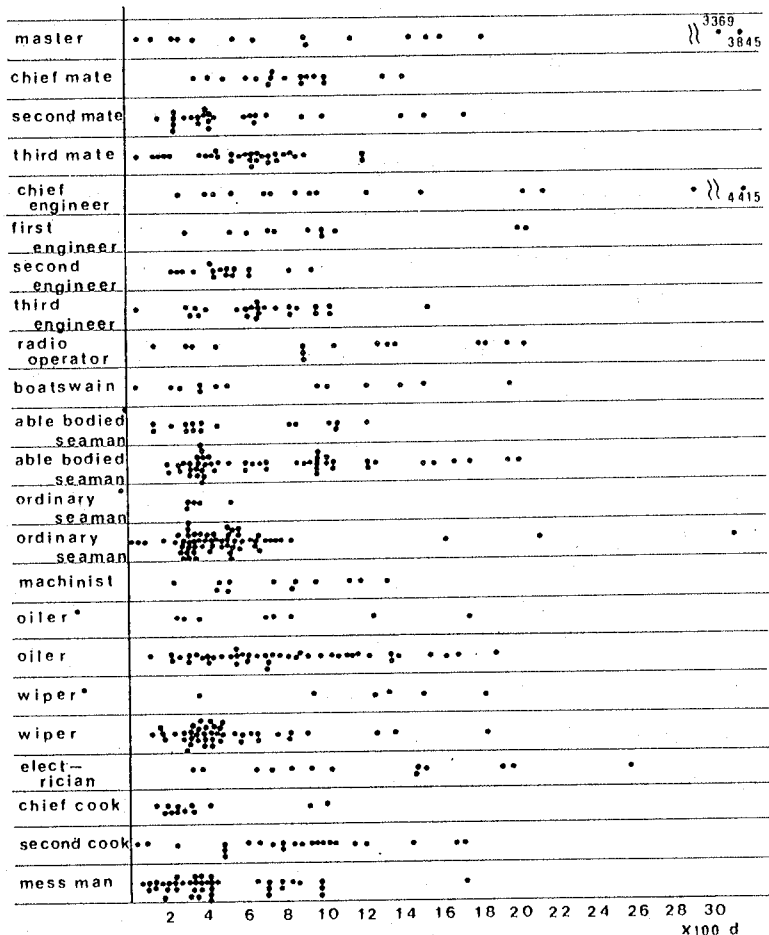


図3 各職種の経験日数

しくは現職になるまで、こういうコースできているものを夫々の職種の普通型とし、これ以外のものを変則型とする。したがって、職員は、部員を経験している者を普通型と、ここでは考えているわけである。

Ordinary Seaman → Able Bodied Seaman
→ Third Mate → Second Mate → Chief Mate

Wiper → Oiler → Fourth Engineer → Third Engineer → Second Engineer → (First Engineer)

Ordinary Seaman → Able Bodied Seaman
→ (Carpenter) → Boastwain Wiper →

Oiler → Machinist

Messman → Second Cook → Chief Cook

それぞれの職種群のなかで、普通型の占める割合は、表10に示すとおり、航海士が81.7%で最も多く、機関士の64.7%が最低で、甲板部員、機関部員、司厨部員はどれもほとんどかわらず、夫々76.1%、76.7%、76.6%となっている。

なお、船長・機関長については、そのほとんどの者の職歴、特に一航士に昇進する前の職歴が不詳なので、この項の分析からは、はずさざるを得なかった。また通信士・エレクトリシアン

については、「昇進」ということがないので、同じくこの項の分析からは、はずした。

c. 変則型の職歴

いままで述べてきたのは、普通型の昇進コースを辿った人々についてであったが、次に変則型について若干ふれておきたい。

変則型とは、上位職から下位職に戻ったり、あるいは、他のパートに変わったりしてきている人を指すわけであるが、その具体的内容は、まさに様々である。そこで無理にまとめようとししないで、各グループ毎に、その具体例を表11、その1～その4に挙げることにしておく。なお Engine Man など良くわからない職名が2、3あるが、そのまま記してある。また、数字は経験日数(実乗船日数)で、アンダーラインをひいてあるのが現職である。

上位職からスタートしているようにもみえるものがかなりあるが、それ以前の記録がないからそうなっているのであり、その後が変則型となっているために、ここに挙げたものである。なお、ここでは変則型についての実例を挙げたわけであるが、各職種群におけるこれら変則型の占める割合は、既に表10職種群別・普通型・変則型の割合で示したとおり、航海士が18.3%、機関士が35.3%、甲板部員

が18.8%、機関部員が17.2%、司厨部員が19.5%で、機関士の割合が最も高く、全体としては20.5%となっている。

また、ここで変則型としてあるもののなかには、個々の船会社の雇用の形態の差によるものも含まれている。例えば、Carpenter という職名で雇用する会社もあれば、たん

表10 職種群別普通型・変則型の割合

職種群	普通型		変則型		不明		合計	
	人	%	人	%	人	%	人	%
Mate	49	81.7	11	18.3			60	100.0
Engineer	33	64.7	18	35.3			51	100.0
Deck Rating	89	76.1	22	18.8	6	5.1	117	100.0
Engine Rating	76	76.7	17	17.2	6	6.0	99	100.0
Catering Rating	59	76.6	15	19.5	3	3.9	77	100.0
Total	306	75.7	83	20.5	15	3.8	404	100.0

に Able Bodied Seaman として雇用する会社もある。このような場合、Able Bodied Seaman として勤務したのち、Carpenter として働き、再び Able Bodied Seaman として

乗船する場合もあるわけで、こういうのは必ずしも、ここで言う意味の変則型とは言い難い面もある。しかし、弁別が困難なので、ここでは一律に変則型として扱った。

表11 変則型の实例 その1

* Chief Mate	158	----> Second Mate	256	----> Chief Mate	694
* Acting Second Mate	417	----> Third Mate	132	----> Second Mate	656
* Able Bodied Seaman	738	----> Second Mate	209	----> Third Mate	244
		----> Second Mate	304		139
* Chief Mate	123	----> Second Mate	320		
* Boatswain	419	----> Third Mate	324	----> Second Mate	232
* Third Mate	369	----> Second Mate	117	----> Third Mate	313
				----> Second Mate	638
* Chief Mate	158	----> Second Mate	256	----> Chief Mate	694
* Third Mate	109	----> Second Mate	233	----> Third Mate	308
				----> Second Mate	421
* Able Bodied Seaman	60	----> Third Mate	511	----> Second Mate	52
				----> Third Mate	404
* Ordinary Seaman	170	----> Able Bodied Seaman	472	----> Ordinary Seaman	280
		----> Third Mate		----> Able Bodied Seaman	133
				----> Third Mate	
* Oiler	1086	----> Third Engineer	379	----> First Engineer	111
		----> First Engineer	502	----> Second Engineer	391
* First Engineer	121	----> Acting Chief Engineer	197	----> First Engineer	346
* Chief Engineer	7108	----> Second Engineer	523	----> First Engineer	517
* First Engineer	3445	----> Chief Engineer	24	----> First Engineer	340
* Oiler	447	----> Second Engineer	324	----> Third Engineer	188
		----> First Engineer	400	----> Second Engineer	373

表11 変則型の实例 その2

* Second Engineer	155	----> Third Engineer	471	----> First Engineer	101
		----> First Engineer	101	----> Second Engineer	1187
* Second Engineer	688	----> First Engineer	24	----> Second Engineer	383
* Fire Man	344	----> Third Engineer	433	----> Forth Engineer	380
* First Engineer	2000	----> Chief Engineer	621	----> Third Engineer	341
				----> Second Engineer	786
* Fire Man	182	----> Oiler	303	----> Third Engineer	320
				----> Second Engineer	277
* App. Engineer	711	----> Second Engineer	105	----> Third Engineer	992
* Third Engineer	376	----> Second Engineer	732	----> Third Engineer	324
* Fifth Engineer	81	----> Machinist	989	----> Third Engineer	416
* Oiler	600	----> Third Engineer	282	----> Second Engineer	39
				----> Third Engineer	293
* Third Engineer	560	----> First Engineer	238	----> Second Engineer	81
		----> Third Engineer	264	----> First Engineer	275
* Machinist	770	----> Oiler	1413	----> Third Engineer	
* Electrician	44	----> Wiper	392	----> Third Engineer	404
* Carpenter	376	----> Able Bodied Seaman	89	----> Boatswain	805
* Carpenter	167	----> Boatswain	326	----> Carpenter	306
				----> Boatswain	
* Able Bodied Seaman	1148	----> Boatswain	408	----> Able Bodied Seaman	66
				----> Boatswain	
* Messman	237	----> Ordinary Seaman	144	----> Able Bodied Seaman	472
* Messman	327	----> Ordinary Seaman	94	----> Able Bodied Seaman	265
* Carpenter	806	----> Boatswain	48	----> Able Bodied Seaman	

表11 変則型の実例 その3

* Able Bodied Seaman	1312	---->	Ordinary Seaman	272	---->	<u>Able Bodied Seaman 99</u>	
* Able Bodied Seaman	40	---->	Ordinary Seaman	133	---->	<u>Able Bodied Seaman 476</u>	
* Able Bodied Seaman	921	---->	Carpenter	159	---->	<u>Able Bodied Seaman</u>	
* Ordinary Seaman	169	---->	Able Bodied Seaman	471	---->	Boatswain	113 ----> Able Bodied Seaman 134 ---->
		---->	Carpenter	209	---->	<u>Able Bodied Seaman</u>	
* Messman	400	---->	Ordinary Seaman	423	---->	<u>Able Bodied Seaman</u>	
* Able Bodied Seaman	141	---->	Messman	186	---->	<u>Able Bodied Seaman 764</u>	
* Messman	195	---->	Ordinary Seaman	120	---->	Able Bodied Seaman 239	----> Ordinary Seaman 122 ---->
		---->	<u>Able Bodied Seaman 585</u>				
* Machinist	3329	---->	Wiper	429	---->	Oiler	444 ----> Machinist
* App. Engineer	546	---->	<u>Machinist</u>	1124			
* Wiper	410	---->	Oiler	563	---->	Wiper	181 ----> Oiler 268
* Oiler	514	---->	Third Engineer	24	---->	<u>Oiler 626</u>	
* Oiler	912	---->	Engineer	694	---->	<u>Oiler 305</u>	
* App. Engineer	339	---->	Oiler	610	---->	(Navy)	834 ----> Oiler 291
* Messman	203	---->	Wiper	195	---->	<u>Oiler 910</u>	
* Wiper	245	---->	Oiler	40	---->	Wiper	327 ----> Oiler 155
* Messman	468	---->	Wiper	356	---->	<u>Oiler 446</u>	
* Wiper	668	---->	Oiler	141	---->	Wiper	133 ----> Oiler 282
* Engineman	4191	---->	Instructor	2784	---->	<u>Oiler 384</u>	

表11 変則型の実例 その4

* Mechanic	678	---->	<u>Wiper 448</u>				
* Engine Man	110	---->	Wiper	143	---->	Oiler	173 ----> Wiper 94
* Engine Man	1095	---->	<u>Wiper</u>				
* App. Engineer	212	---->	Oiler	480	---->	<u>Wiper</u>	
* Chief Cook	9722	---->	Second Cook	597	---->	<u>Chief Cook 610</u>	
* Chief Cook	209	---->	Second Cook	979	---->	<u>Chief Cook 300</u>	
* Second Cook	1358	---->	Messman	290	---->	Second Cook	60 ----> Chief Cook 273
* Second Cook	271	---->	Chief Cook	206	---->	Second Cook	377 ----> Chief Cook
* Second Cook	369	---->	Messman	198	---->	<u>Second Cook 768</u>	
* Assist. Cook	23	---->	<u>Second Cook 576</u>				
* Messman	420	---->	Second Cook	333	---->	Messman	211 ----> Second Cook 203
* Able Bodied Seaman	279	---->	<u>Messman 713</u>				
* Messman	602	---->	Second Cook	60	---->	<u>Messman 489</u>	
* Chief Cook	350	---->	<u>Messman 51</u>				
* Chief Steward	825	---->	<u>Messman 352</u>				
* Wiper	157	---->	Oiler	154	---->	<u>Messman 153</u>	
* Messman	500	---->	Ordinary Seaman	537	---->	<u>Messman 220</u>	
* Messman	490	---->	Wiper	82	---->	Oiler	24 ----> Wiper 287 ---->
		---->	Oiler	125	---->	<u>Messman 334</u>	

d. 職員の職種別年令構成

今まで述べてきた職歴とも関係するので、ここで、職種別に年令構成をみると、表12のとおりとなる。

く、前者が30.0才、後者が34.6才となっている点である。職歴の項で述べたように、多くの者がOrdinary SeamanやWiperからスタートすることの影響であろうか。

表12 職員の職種別年令構成

職 種	人 数	年 令				年 令 区 分									
		最 高	最 低	平 均	偏 標 差 準	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60-	Tot .
						%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
Master	16 (283)	58	35	47.9	8.0				12.5 (0.7)	25.0 (6.4)	18.8 (29.7)	6.3 (43.1)	37.4 (19.8)*		100.0 (100.0)
Chief Mate	18 (285)	53	28	37.5	6.4		5.6 (2.5)	38.8 (35.1)	22.2 (34.7)	16.7 (25.3)	11.1 (1.8)	5.6 (0.7)		100.0 (100.0)	
Second Mste	21 (269)	50	26	34.1	6.8			23.8 (1.1)	47.6 (48.0)	14.3 (42.4)		9.5 (1.5)	4.8 (0.7)	100.0 (100.0)	
Third Mate	20 (267)	47	23	30.0	5.2	5.0 (51.3)	50.0 (44.6)	30.0 (3.4)	10.0 (0.7)		5.0			100.0 (100.0)	
Chief Engineer	15 (289)	65	35	48.0	10.0				26.7 (0.7)	13.3 (3.8)	6.7 (16.3)	26.7 (47.8)	13.3 (31.5)*	13.3	100.0 (100.0)
First Engineer	17 (266)	54	31	38.1	6.5			41.1 (4.5)	29.4 (32.7)	11.8 (35.0)	5.9 (19.9)	11.8 (5.3)		100.0 (100.0)	
Second Engineer	12 (245)	57	27	37.8	7.0		8.3 (2.4)	25.0 (46.9)	41.7 (35.9)	16.7 (9.0)			8.3 (2.9)	100.0 (100.0)	
Third Engineer	22 (248)	52	25	34.6	7.1	31.8 (55.2)	31.8 (42.7)	22.7 (1.6)			9.1 (0.4)	4.6		100.0 (100.0)	
Radio Operator	14 (518)	56	26	44.4	9.2		14.3 (12.2)		14.3 (12.2)	28.6 (14.9)	7.1 (10.2)	21.4 (16.2)	14.3 (21.9)*	100.0 (100.0)	

()は日本人船員の分析結果 1976. * 50才以上をまとめてある

各職種とも人数が少ないという難点があるが、それでもある程度の傾向はうかがえる。また、参考のために、我々が、1976年に実施した日本人船員(職員のみ)の調査結果を各欄の()内に示した。

どの職種についても共通していることは、年令幅が比較的大きく、最高年令と最低年令とのひらきがかなり大きいという点である。

次に目立つことは、三等航海士、三等機関士(四等機関士を含む)の平均年令がかなり高

その他の職種について、簡単にその特徴と思われる点について記してみよう。

船長・機関長は35才という若い人もいるが、平均年令は、前者が47.9才、後者が48.0才と比較的高く、これは、50才以上の方が40%以上もいることの反映である。因みに、日本人の場合と比較すると、かえって年配者の占める割合は、日本人の方が少ないという結果となっている。

一等航海士・一等機関士は、どちらもほとんど同じ傾向であり、平均年令は、前者が、37.5才、後者が38.1才である。ここでも日本人よりも、若干、年令が高いようである。

脚注

* 船員の生活態様と意識調査 1976. 3.
日本海技協会

通信士には、若い人があまりいないようである。これは、若い人にとって、仕事先をみつけることが困難なためではなかろうか。

以上、極く簡単に、職種別に年令構成をみてきた。こうした分析をするには不十分な数であるので、はっきりしたことは勿論判らないが、それでも、“フィリピンの職員といったって、みんな若僧ばかりで、……”，という巷間に良くある表現は、必ずしも当てはまらないようである。しかし、いずれにしても、今後もっとサンプル数を増やして、教育制度、資格制度、雇用の実質的形態、そして世界の船員市場での需給関係、などとの関連の上で、考察する必要がある。この点は、職歴や昇進状態、経験、実態を知る場合でも同じである。

8. 学 歴

フィリピンの一般教育制度と船員教育との概況については、報告書第一部で、A号で出会った乗組員については報告書第二部で述べたとおりである。

それが多数となった場合にどうなるであろうか。

a. 出身校と出身者数

最終学歴として記録されている435人の出身校の数は、全部で144校にものぼる。出身校の名前と出身者の数を職種群別に示すと表13のその1～その6のとおりである。

この表から判るように、名前の上からは University, College, から Elementary School まで、レベルの差があるようにみうけられる。

表13 出身校と職種群別出身者数 その1

学 校 名	Officer				Rating				
	Master	Mate	C.Eng'r	Eng'r	Radio	Deck	Eng.	Cat.	Tot.
A									
Adamson University							1		1
Adelphi College				1					1
Angono Private High School						1			1
Antique High School								1	1
Araullo High School								1	1
Arellano High School						2	1		3
Arellano University						1			1
B									
Baliwag College								1	1
Balayan Institute						1			1
Bauan High School						2			2
Bicol Regional School of Arts and Trades							1		1
C									
Caloocan City High School								1	1
Capitz High School						1			1
Cayetano Arellano High School								1	1
Cavite High School						1		2	3
Cavite National High School						3	2	2	7
Cavite Navigation School					1				1
Cebu City Central College						1			1
Cebu Central College		2				1	2		5
Cebu College of Commerce		2				1			3
Cebu Institute of Technology			1	1			2		4
Cebu Polytechnic School		3							3
Cebu School of Arts and Trades			3	3					6
Cebu Trades School							1		1
Claveria High School								1	1
C.G.S.S.	1								1

表13 出身校と職種群別出身者数 その2

学 校 名	Officer					Rating			
	Master	Mate	C.Eng'r	Eng'r	Radio	Deck	Eng.	Cat.	Tot.
D									
Dao Cathoric High School						1		1	2
Del Pilar Academy							1		1
Don Bosco							1	1	2
Don Bosco School								1	1
Don Bosco Youth Center						1	1	3	5
Dona Josefa Ed Marcos Foundation							1		1
E									
Electronics School					1				1
Executive Development Academy							1		1
F									
Far Eastern University		1		1		1		1	4
Feati University		4	1	4	2	8	9*	2	30
Fire Fighting and Damage Control				1					1
G									
Gerona Institute						1			1
Gregorio G Sansianco High School							1		1
Guimadal High School				1					1
Guzman Institute of Electronics				1			1		2
Guzman Institute of Technology					1	2	1		4
I									
Iloilo City College				1					1
Iloilo City High School							2**		2
Iloilo Maritime Academy	1	10	1	7		8	13	1	41
Iloilo School of Arts and Trades				2					2
J									
Jose Rezar College							1		1
Jr. Yangco High School							1		1

表13 出身校と職種群別出身者数 その3

学 校 名	Officer					Rating			
	Master	Mate	C.Eng'r	Eng'r	Radio	Deck	Eng.	Cat.	Tot.
K									
Kalapan High School			1						1
Kawit High School						1			1
L									
Laguna College								1	1
Laguna Institute								1	1
Lake Shore Institute							1		1
M									
Mabini Junior College						1			1
Malabon Standard High School								1	1
Manaoag High School						1			1
Manila Institute of Hotel and Restaurant Adm.								1	1
Manuel L. Quezon University							1	1	2
Mapa High School							1		1
Mapa Vocational School							1*		1
Mapua Institute of Technology				1			1	1	3
Marikina School of Arts and Trades							1		1
Mariner's Polytechnic School							1		1
Mariner's Vocational Center							1		1
Marinduque School of Arts and Trades							1		1
Military Training Group CNB							1		1
Mindanao Aero Nautical Technical School							1		1
N									
Namul Polytechnic Institute			1	2			1*		4
National Naval Base								1	1
National Teacher's College							1		1
Naval Intelligence School						1			1
Naval School Center		3					1	1	5
Naval Training Center						1	1		2

表13 出身校と職種群別出身者数 その4

学 校 名	Officer					Rating			
	Master	Mate	C.Eng'r	Eng'r	Radio	Deck	Eng.	Cat.	Tot.
Naval Training Center, Cavite						1	2*		3
Naval Training Command				1			1		2
NSC Service School				1	1				2
N.R.S.I.T.				1			1*		2
O									
Off Shore Patrol School						1			1
Olongapo National High School								1	1
P									
Palawan School of Arts and Trades						1			1
Panapanga College						1			1
Panay College								1	1
Panagasian Provincial High School						1			1
Paracale High School							1		1
Piaridel High School								1	1
Philippine Air Pats								1	1
Philippine College of Arts and Trades			2	4			4		10
Philippine College of Criminology				1					1
Philippine Maritime College						2			2
Philippine Maritime Institute	4	22	2	4		26	6	3	67
Philippine Merchant Marine Academy	4	8		3		6			21
Philippine Nautical School	2					2	1		5
Philippine Navy Electronics School							1*		1
Philippine Navy Training Center	1	1			2	1	1		6
Philippine School of Business Administration							1		1
Philippine Technical School							1*		1
PMI / University of The East		1							1
Philippine Navy N-2						1			1
Philippine Coast Guard Training Center				1		15	3	17	36

表13 出身校と職種群別出身者数 その5

学 校 名	Officer					Rating			
	Master	Mate	C.Eng'r	Eng'r	Radio	Deck	Eng.	Cat.	Tot.
R									
Rafael Palma College						1			1
Ramon Avancena High School							1*		1
Rizar College						1		1	2
Rizar High School						1			1
Rodriguez Memorial School of Arts and Trades							1*		1
Roosevelt Memorial High School								1	1
S									
Sacred Heart Academy						1			1
Saint John Academy								2	2
Samson Technical School							1		1
San Agustin High School								1	1
San Agustin University						1			1
San Fernando Technology							1		1
San Sebastian College						1		2	3
Southern Institute of Radio Electronics					1				1
St. Louis University				1			1		2
St. Matuewis High School							1		1
T									
Tabaco High School						1			1
Tangka Elementary School						1			1
Tanza High School							1	2	3
Technical Institute of Philippine								1	1
Teodora Alonzo High School						1			1
Tirona High School								1	1
Torres High School						1			1

察される。

機関長について

13名しかいないので、はっきりしたことは言えないが、特に集中している学校はなさそうである。なお、前述したように U.S. Merchant Marine Academy 出身が1人いる。

機関士について

46名の機関士の場合、出身校の数が多く、その総数は25校にもなり、そのかわり、一つの学校からの出身者の数は少ない。最も多い Iloilo Maritime Academy でも7名で、1名出身という学校が25校のうち17にもものぼっている。

また、現在機関部員として働いている人で、最終学歴が判明している94人のうち、41名は、この25校のうち11校の出身である。これらの41名の人々の多くはやがて機関士になってゆくであろうが、航海士の場合と同様に、現在すでに職員となっている人よりも、出身学校のひろがり小さくなっているのは、どういう理由によるものなのであろうか。いわゆる船員ブームの時代が過ぎ去って、ある程度、選別される時代に入りつつあることを意味しているのであろうか。

なお、これらの出身校の水準については、その実態は全く不明で、今後の調査によらねばならないが、名前の上でみる限り、ほとんどが単科大学以上であると推察することもできる。

通信士について

これも人数が少ないが、13名の通信士の出身校が11校ある、という状態は、一つの特徴といえるかも知れないが、はっきりしたことはわからない。

甲板部員について

航海士の項で述べた8校からの52名以外の63名の甲板部員は、42校からの出身で、そのうち Philippine Coast Guard Training Center の15名を除けば、ほとんど1校1人程度で、学校の水準としては、High School という名前を持っているところが多い。(前述の8校を除く。)

機関部員について

機関士の項で述べた44名の機関部員の出身校は11校であったが、それ以外の53名の出身校数は44校となっていて、University of The East の4名、U.S. Naval Training Center の3名、Philippine Coast Guard Training Center の3名を除けば、ほとんど1校1人である。学校の水準としては、詳細は勿論不詳であるが、名前から判断する限り、甲板部員の出身校よりも上級のように推察できる結果となっている。

エレクトリシアンについて

これもはっきりしたことはわからないが、13名のうち、3名が海軍関係であることを除けば、ほとんどが1校1人となっている。

司厨部員について

68名の司厨部員の出身校数は40校である。Philippine Coast Guard Training Center の17名が群を抜いて多いが、あとは Don Bosco Youth Center, Philippine Maritime Institute の3名を除けばほとんどが1校1人である。University と名のつく学校の出身者も若干いるが、内容は不明である。

以上、出身校について、その名前で判断して分析してきたが、これは、前にもふれたように University, High School といった名前がそのまま日本的意味あいでの水準を示して

いるとは考えられず、その点は、次に述べるように、これらの学校を出て取得した資格をみるとよくわかる。

c. 卒業時の資格(Degree)

これまで述べてきた144校の学校（その他の教育機関も含む）を卒業して得た資格には15種類ある。ただし、全員について判っているわけではなく、全体の60%弱の264名しか記載がないので、この他にも別の資格があるかもしれない。264人の持つ資格の種類とそのうちわけは、表16のとおりである。

小学校卒業と思われる ESG が約3%、高校卒業程度と思われる HSG が14%、ANS、AMT、AME を加えたいわば短大卒程度と思われるものが43%、大学卒(Bachelor を持っているもの) が21%という状況になっていて、短大卒程度が最も多くなっている。

表16 資格の種類

資格の種類	略号	人	%
Elementary School Graduate	ESG	7	2.7
High School Graduate	HSG	36	13.6
Secondary School Graduate	SSG	22	8.3
Vocational School Graduate	VSG	27	10.2
Associate of Nautieal Science	ANS	51	19.3
Associate of Marine Transportaion	AMT	13	4.9
Assoicate of Marine Engineering	AME	47	17.9
Assoicate of Engi-neering Science	AES	3	1.1
	SME	3	1.1
Bachelor of Science of Marine Trans- portation	BSMT	20	7.6
Bachelor of Science of Mechanical Engi- neering	BSME	6	2.3
	BMSG	26	9.8
	BSIE	1	0.4
	BBA	1	0.4
Bachelor of Science	BS	1	0.4
Total		264	100.0

表17 出身校と取得資格 その1

学 校	ESG	HSG	SSG	VSG	ANS	AMT	AME	AES	SME	BSMT	BSME	BMSG	BSIE	BBA	BS	Unk'n	Tot.
A																	
Adanson University																1	1
Adelphi College																1	1
Angono Private High School			1														1
Antique High School				1													1
Araullo High School					1												1
Arellano High School																2	3
Arellano University																1	1
B																	
Ballwag College					1												1
Balayon Institute																1	1
Bauan High School																1	2
Bicol Regional School of Arts and Trades																1	1
C																	
Caloocan City High School																1	1
Capitz High School																1	1
Cayetano Arellano High School			1														1
Cavite High School				3													3
Cavite National High School					1							2					7
Cavite Navigatton School						1											1
Cebu City Central College																	1
Cebu Central College							2		2								5
Cebu Collge of Commerce						1											3
Cebu Institute of Technology												2					4
Cebu Polytechnic School																	3
Cebu School of Arts and Trades								2	2								6
Cebu Trades School																	1
Claveria High School																	1
C.G.S.S.																1	1

それでは、個々の教育機関を出たときにどんな資格を取得するのであろうか。144校全部についてみると、表17その1～その6のとおりである。最も目立つ点は、同じ教育機関をでていても、コースによるちがいのせいかどうか、取得した資格は同じではない。したがって、University 出身とか High School 出身といっても、それがそのまま、ある種の水準を表現しているわけではないことは明らかである。

一方、今回名前の挙ってきた学校は全部で144校あり、その出身者数は435名であることは既に述べたとおりであるが、一校で10名以上の出身者を出しているところは、表18に整理したように Feati University, Philippine College of Arts and Trades, Iloilo Maritime Academy, Philippine Maritime Institute, Philippine Merchant Marine Acade-

my, Philippine Coast Guard Training Center, の6校にしかすぎず、しかもこの6校で半数近い205名の出身者を出している。残りの230名は、138校からでているわけであって、この結果でみる限り、上記の6校が有力教育機関のようにも考えられる。しかし実際のところは、はっきりとはしていない。今回、分析の対象とした船員集団の特徴かもしれないからである。この点に関しては、これら教育機関の所在地に関する分析などが必要であるが、今回の資料からは、それがわからなかった。今後の課題として残しておきたい。

なお、これらの教育機関名と良く似ているものがあり、これらを確認した上でこの分析をすれば若干異なる傾向になることは予想される。

表17 出身校と取得資格 その2

学 校 名	ESG	HSG	SSG	VSG	ANS	AMT	AME	AES	SME	BSMT	BSME	BMSG	BSIE	BRA	BS	Unk'n	Tot
D																	
Dao Catholic High School			1													1	2
Del Pilar Academy																1	1
Don Bosco										2							2
Don Bosco School																1	1
Don Bosco Youth Center										5							5
Dona Josefa Ed Marcos Foundation										1							1
E																	
Electronics School				1													1
Executive Development Academy				1													1
F																	
Far Eastern University							1									3	4
Feati University				4	4	1	5	1								15	30
Fire Fighting and Damage Control																1	1
G																	
Gerona Institute			1														1
Gregorio G Salsiano High School											1						1
Guimadal High School																1	1
Guzman Institute of Electronics				1													1
Guzman Institute of Technology				1												3	4
I																	
Iloilo City College											1						1
Iloilo City High School				2													2
Iloilo Maritime Academy			1		11	2	18									9	41
Iloilo School of Arts and Trades																2	2
J																	
Jose Rezar College			1														1
Jr. Yangco High School																1	1

表17 出身校と取得資格 その3

学 校 名	ESG	HSG	SSG	VSG	ANS	AMT	AME	AES	SME	BSMT	BSME	BMSG	BSIE	BDA	BS	Unk'n	Tot
K																	
Kalapan High School		1															1
Kawit High School		1															1
L																	
Laguna College		1															1
Laguna Institute																1	1
Lake Shore Institute																1	1
M																	
Mabini Junior College		1															1
Malabon Standard High School																1	1
Manaoag High School		1															1
Manila Institute of Hotel and Restaurant Adm.				1													1
Manuel L. Quezon University																2	2
Mapa High School		1															1
Mapa Vocational School				1													1
Mapua Institute of Technology																3	3
Marikina School of Arts and Trades					1												1
Mariner's Polytechnic School																1	1
Mariner's Vocational Center					1												1
Marinduque School of Arts and Trades		1															1
Military Training Group ENB				1													1
Mindanao Aero Nautical Technical School								1									1
N																	
Namf Polytechnic Institute								3									4
National Naval Base					1												1
National Teacher's College																1	1
Naval Intelligence School																	1
Naval School Center																3	5
Naval Training Center																	2
Naval Training Center, Cavite																	3
Naval Training Command																2	2
NHC Service School																	2
N.R.S.I.T.																2	2

表17 出身校と取得資格 その4

学 校 名	ESG	HSG	SSG	VSG	ANS	AMT	AME	AES	SME	BSMT	BSME	BMSG	BSIE	BDA	BS	Unk'n	Tot
O																	
Off Shore Patrol School			1														1
Olongapo National High School																1	1
P																	
Palawan School of Arts and Trades					1												1
Pampanga College																1	1
Panay College																1	1
Pangasinan Provincial High School		1															1
Paracale High School																1	1
Piaridel High School																1	1
Philippine Air Pats																1	1
Philippine College of Arts and Trades					1			2	2				1			4	10
Philippine College of Criminology																1	1
Philippine Maritime College																2	2
Philippine Maritime Institute						25	8	9					5			20	67
Philippine Merchant Marine Academy						5					8	1				7	21
Philippine Nautical School						2										3	5
Philippine Navy Electronics School																1	1
Philippine Navy Training Center						4			1								6
Philippine School of Business Administration																1	1
Philippine Technical School							1										1
PHI/University of The East																1	1
Philippine Navy N-2																1	1
Philippine Coast Guard Training Center													17			19	36
R																	
Rafael Palma College																1	1
Ramon Avancena High School																	1
Rizal College																2	2
Rizal High School																1	1
Rodriguez Memorial School of Arts and Trades																1	1
Roosevelt Memorial High School																1	1

表17 出身校と取得資格 その5

学 校 名	ESG	HSG	SSG	VSG	ANS	AMT	AME	AES	SME	BSMT	BSME	BMSG	BSIE	BBA	BS	Unk'n	Tot.
S																	
Sacred Heart Academy			1														1
Saint John Academy			1													1	2
Samson Technical School																1	1
San Agustin High School				1													1
San Agustin University																1	1
San Fernando Technology																1	1
San Sebastian College													1			2	3
Southern Institute of Radio Electronics					1												1
St. Louis University																2	2
St. Matuewis High School			1														1
T																	
Tabaco High School				1													1
Tangk! Elementary School			1														1
Tanza High School				3													3
Technical Institute of Philippine																1	1
Teodora Alonzo High School																1	1
Tirona High School				1													1
Torres High School																1	1
U																	
United Technical Institute					1												1
Universal Radio Institute					1												1
University of The East														1		6	7
University of Iloilo											1						1
University of Manila			1														1
University of San Agustin																1	1
University of South Philippine																1	1
U.S. Army Engineering District					1												1
U.S. Electronics School, San Francisco					1												1
U.S. Merchant Marine Academy, Kings Point											2				1		3
U.S. National Technical School, Los Angeles					1												1
U.S. Naval Training Center					1											2	3
U.S. Navy Training Center, San Diego																1	1

表17 出身校と取得資格 その6

学 校 名	ESG	HSG	SSG	VSG	ANS	AMT	AME	AES	SME	BSMT	BSME	BMSG	BSIE	BBA	BS	Unk'n	Tot.
V																	
Victoria Salcedo High School																1	1
Vigan Maritime Academy								1									1
Villanor High School			1														1
Visayan Central College				1													1
Visayan Maritime Academy						1				2							3
W																	
Western Akian Academy			1														1
Western Institute of Technology								3			1						4
Western Philippine College			1													2	3
Z																	
Zamboanga School of Arts and Trades																1	1
Total	7	36	22	27	51	13	47	3	3	20	6	26	1	1	1	171	435

表18 主要教育機関と取得資格別出身者数

学 校 名	資 格 の 種 別																tot. Unk'n	Tot.
	ESG	HSG	SSG	VSG	ANS	AMT	AME	AES	SHE	BSMT	BSME	DMSG	DSIE	DBA	BS			
Philippine College of Arts and Trades				1			2		2				1			6	4	10
Feati University				4	4	1	6									15	15	30
Iloilo Maritime Academy			1		11	2	18									32	9	41
Philippine Maritime Institute					25	8	9					5				47	20	67
Philippine Merchant Marine Academy					5					8	1					14	7	21
Philippine Coast Guard Training Ceter												17				17	19	36
Total		1		5	45	11	35		2	8	1	22	1		131	74	205	
Others (138 Schools)	7	35	22	22	6	2	12	3	1	12	5	4	0	1	1	133	97	230
Grand Total	7	36	22	27	51	13	47	3	3	20	6	26	1	1	1	264	161	435

表19 現職と所有海技免状

	所 有 海 技 免 状																				Unk'n	
	Philippine 政府発行												Liberia and / or Panama 政府発行							RO		
	Master	Ch'f M.	2nd M.	3rd M.	Ch'f E.	2nd E.	3rd E.	4th E.	FCRT	M.	A.	Others	Master	Ch'f	2nd	3rd	Ch'f	1st	2nd			3rd
M.	M.	M.	M.	E.	E.	E.	E.		E1k.	E1k.		M.	M.	M.	M.	E.	E.	E.	E.			
Master	13												*7	*2							1	
Ch'f M.	2	16												6							3	
2nd M.		1	16	4											9	1					2	
3rd M.				16											7						3	
Ch'f E.					13									*3							2	
1st. E.						15	2										5				1	
2nd. E.							1	12	1								1	3	1		1	
3rd. E.								1	4	14								1	6		1	
4th. E.									1	1											1	
Bo'sn												4									1	
AB				3																	1	
OS				1																	1	
Mach'st							1														1	
Officer										6											7	
Elect'n									3	1	4	1									1	
Radio O											14									3	*1	
Total	15	17	16	24	13	17	20	25	15	4	1	4	7*	11*	9	8	6	4	7	3	*1	15

*それぞれ1名の Panama 発行を含む(以下同様)

9. 海技免状の所有状況

表19は、今回分析の対象となった464名の、海技免状の所有状況を示したものである。各個人については、現時点で所有している最高位のもので分析した。若干、資料の不備があつて詳細は必ずしも明らかではないが、大体

の傾向をつかめるようである。

フィリピン政府発行のものとリベリア政府発行のもの、及び数は少ないが、パナマ政府発行のもの（表中に*印をつけてあるのがこれで、この数のうち1名がパナマ政府発行の海技免状所有者であることを示している。）を併

せもっていることは当然として（記録にない人もいるが）、この2ヶ国以外の免状はない。

一等航海士のなかには、2名程、船長の免状（フィリピン政府発行）を持っている人がいる。また、部員のなかにも、三等航海士や三等機関士、四等機関士の免状を持っている人も僅かではあるが居る。

なお、フィリピンの海技制度には、一等機関士はないとのことである。

また、機関士の呼称について、正確には、フィリピンでは、Chief Marine Engineer, Second Marine Engineer, Third Marine Engineer, Fourth Marine Engineer, リベリアでは Chief Engineer, First Assistant Engineer, Second Assistant Engineer, Third Assistant Engineer であるが、表中には省略して記した。

C. あとがき

混乗船に関する報告書の第一部・第二部を世に出したところ、予想以上に様々な反応があり、今後もこの研究を展開してゆく上で参考となる建設的な批判や意見が多数寄せられ、我々としても大いに勇気づけられた。なかでも、第三部は、いつどんな内容で出るのかという問い合せと共に、“フィリピン船員の一般的事情をもっと知りたい”という希望が非常に多く寄せられた。勿論、フィリピン船員だけでなく、他の国々の船員に関する調査も早急に実施すべし、という声も多かった。

フィリピン以外の国の船員事情については勿論、フィリピン船員についても、我々の報告は極めて不十分なもので、上述した批判や意見に応えきれているものでは決してない。

したがって、今後も一層この混乗問題、とりわけ東南アジア船員に関する研究を展開してゆく必要があり、我々もまた研究を続けてゆきたいと希望している。

これらの問題に関する調査研究をまともに展開してゆくのは、様々な困難があるが、幸いに、社内資料を提供して下さった某会社を好例として、自らの混乗体験を語って下さった船員の方々の、公表する時期と方法に関する条件つきではあっても、混乗にかかわる諸体験を話して下さったいくつかの船社の経営者の方々の協力など、これまでに沢山の方々の協力が得られてきている。今後とも、関係者の理解と協力のもとにこれらの研究に取り組んでゆきたいと考えている。そうして、この報告書の第三部を最終部としないで、次々と報告してゆきたいと願っている。

（本稿は、大橋信夫・服部 昭、混乗船における東南アジア船員の生活行動と労働に関する調査研究——フィリピン船員との混乗について——第3部あるフィリピン船員集団について 1981.6 海上労働科学研究所、からの抜粋である。なお、本調査のあと、フィリピン船員教育の実態調査（第4部 1983）などを実施してきているが、これらについては紙幅の関係で別の機会にゆずることとしたい。）